

野上清生子全集

別卷三

岩波書店

野上彌生子全集 別卷三

(別巻全三冊)

一九八二年八月九日 発行

定価 三五〇〇円

著者 野上彌生子

発行者 緑川 亨

発行所 株式会社 岩波書店

〒101 東京都千代田区一ツ橋一五五
電話 〇三六五四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目 次

桃咲く郷	三
菊子の話	一九
初 夢	二七
頬白頬赤	三五
人形の望	四九
雛 子	一五
一本足の鶴	一四七
兄弟の百姓	一五三
ある泥坊の話	一五九
竜宮へ行つた娘の話	一七九

おばあさんと小豚	一八九
神様と巨人	一九九
山伏の話	二二三
森の家	二二一
小鳥の話	二二三
小さき生きもの	二四九
赤ちゃん	二四三
くまのおうち	二四四
きんぎょ	二四六
あさがお	二四八
あきまつり	二五〇
ストーヴ	二五二
はつうま	二五三
そつげふしき	二五五

目 次

花まつり.....	三三七
セルのきもの.....	三五八
ほととぎす.....	三五九
ドロップス.....	三六一
針供養.....	三六二
サーカスの娘.....	三六三
つゆのころ.....	三六五
ほたる.....	三六七
たなばたさま.....	三六九
虫ぼし.....	三七一
きくのはな.....	三七三
がくげいくわい.....	三七四
もものはな.....	三七六
薔薇のお家.....	三七八

豎琴の一曲	三八一
花のゑのぐ	三九一
金時計	四〇三
うまつぐらの花束	四一五
空に飛ぶころ	四二九
人間はどれだけの土地がいるか	四三五
蟻の話	四四五
ねずみの嫁入り	四五一
虹のむすめ	四五九
象の話	四六七
エッダ	四七三
十二人のお客さま	四七九
珍しい鳥	四八七
おさるさん	四九三

目 次

はちの話	四九
じやがいもの話	五〇
人形むすめ	五三
めくらのおぢいさんの話	五九
後 記	五三

兒童文學

桃咲く郷さと

お新は十三の今年まで何にも知らずに育ちました。お父さんも知らなければ、お母さんも知りません。何所の何と云ふ人が、自分のお父さんお母さんと呼ぶ人であらう、如何した訳で自分はこんな悲しい辛い他人の家へ、小さい時からうち捨てられてしまったんだらう、自分と同じ年頃の子供には、みんなお父さんがある、お母さんがある、学校に上っている御本を教はって、美しい着物をきて、美しいリボンを飾って、それでお父さんお母さんに甘へてゐられる。自分は——お父さんお母さんの顔さへ知らぬのである。自分にも本統にお父さんお母さんと云ふものがある事はあったのか知ら、よその人は自分を捨て子だの乞食の子だのと悪口を云ふ。お内儀さんもいつだったか、

「お前はね、ずっとお前のまだ赤ん坊の頃にうちの店先に捨て児にされてぎゃあ／＼泣いてゐただよ。寒い冬のま夜中さ、余りぎゃあ／＼泣いてうるさいから出て見るとお前が汚れたボロ／＼着物にくるまって泣いてるぢやないか。それを亡くなった此家のお婆さんが可愛想だつて拾ひ上げてかうして育て来たんだよ。外に子供は大勢だし並大抵の世話ぢやありやしない。命の親だよ。恩を忘れると本統に罰が当るよ。」

とさぞ恩着せがましく云ひ聞かされた事がありました。お新は赤ん坊の自分をこんな家の店先に、寒い冬の夜中に捨て児にしたお父さんお母さんを恨めしいと思ふより先に、自分にもお父さんお母さんがあったと云ふ事が力強い様に思はれました。そしてどんな苦しい目を見てもいゝから、本統のお父さんお母さんと云ふものに廻りあひ度いものだと思ふ考が、お新の小さい心の底にいつも消えぬとし火の様に燃えてゐました。

お新の捨て児にされたのは、ある田舎町の小さい豆腐やでした。お新はその豆腐やの家で子守りの様な下女の様な種々な仕事や用事に朝から晩まで追ひ使はれてゐるのでした。

豆腐やの事だから、朝と云つてもまだ真暗い夜の中から起きなければなりません。一番に起されるのはいつでも此お新であります。

「お新ッ、起きな。」

と云ふ内儀さんの声が、頭からすっぽりかぶつて、やっと寒いのを我慢して寝てゐるお新の堅い煎餅布団の上にひびきます。

「ア、ア——ッ」

と生返事で茫乎でもしてゐやうものなら、すぐボカンと鉄砲玉の様な亭主の拳骨がお新の横顔にとんで行きます。

「何をぐづ／＼してゐるんだい、さっさと起きねえか。」

お新は眠たさなどは一時に消えてしまひます。それで両方の眼に涙を一杯湛えながら、こ、そ、と足場の悪い店の土間に下りて行つて、棚に吊るした小さいカンテラの煤けた光りを便りに、豆腐にする豆を挽きにかゝります。挽き木につかまりながら、涙をぼた／＼落してもぢっと声を立てぬ様に辛抱してゐます。もしすゝり泣きの音でも聞えやうものなら、又すぐと、

「朝っぱらからなんだ、め、そ、／＼ばかりして。」

と恐ろしい雷が鳴るのでした。霜の氷る冬の朝など、ヤツと十を越した計りの子供の凍かんだ腕には、重い石の挽き臼が中々廻るのに骨が折れました。けれどもお新は一生懸命円い顔をまっ赤にして、勢を出して重い挽き木にすがりつく様にして働きました。

豆挽きがすむとそれから拭き掃除をしたり勝手に手伝つたり、小い猿の様にかけ廻つて、一寸のひまもなく働かねばなりません。お新はもう馴れてゐるからいくら忙しく追ひ使はれても、少しも辛いとも思ひませんが、ただ毎朝近所の子供や、豆腐やの大きな上の子供達が、みんな誘ひ合つて、

「吉ちゃん行かないか。」

「芳ちゃん行かないか。」

「春ちゃん行かないか。」

とにぎやかに学校へ通ふ有様を見ると、心から羨ましいと思ひます。お新は学校は大好きだけれども家の仕事がいそがしいと云つてやつと尋常の二年迄しか上りませんでした。

朝の用事がすむと銀坊と云ふ三つになる子供をおんぶしてお守りが始まります。銀坊は三つにしては随分大きな赤ん坊ですから、お新の瘠やせた細ほっそりした肩から食はみ出しさうになっておんぶします。けれどもお新はこの銀坊が大好きなんですから少しも重いとは思ひません。全くお新はこの銀坊のお守りをしてる間まが一日いちにちの中で一番たのしい時でした。

亭主や内儀かみさんや他の大きな子供達は、みんなしてお新を非道ひどくしたり、間拔まひけだの厄介やっかいものだと悪口を云ふけれども、銀坊はいつもお新の顔を見るとこゝして笑ひます。お新がみんなから酷いぢめられてしゝ泣ないてゐる時でも、銀坊はお新の肩の上でカラ／＼高笑たかひをして機嫌よくしてゐます。余りお新が泣いてると、自分も一緒に泣き出しさうな顔をして、

「姉ねえや、泣く兄あにいけない／＼。」

と云ひます。お新はかう云はれると、もう涙を流しながら笑顔あがほになるのです。

そして銀坊の頬ほっぺにチュク／＼をして、

「銀坊、いゝ兄あにいゝ兄あにねえ、姉ねえやのいゝ兄あにの銀坊。」

と云ひますと、銀坊も亦一緒になつて廻らぬ舌で、

「姉ねえやのいゝ兄あにの銀坊。」

とお新の口真似をしてにこ／＼します。お新は堪らず抱きしめて、可愛ゆくて／＼食べてしまひ度い様におもはれるのです。

こんな風ですから銀坊は誰たれよりかもお新になづいてお新のあとばかり慕ひました。外の兄弟の子供達がおんぶをしてゐて泣いて／＼仕方のない時も、お新が、

「お、誰たれがよく、こんないゝ兄の銀坊をねえ。」

と云ってすかすと直すぐ泣きやみます。外の兄弟達はそれが半分憎らしい位に思ふのでした。殊に二番目の男の子の倉くらちゃんと言ふ兄が一番いぢ悪でした。倉くらちゃんはいつでも銀坊がお新になづくのをやっかんで、

「そいぢや銀坊は捨て兄のお新の兄になっちまいな、いゝかい、知らないよ。」

と荒々しく結ゆはひ紐ひもを解いて脊中から下ろすと、銀坊ははづみを打ってどんと後うしろに倒されて泣き出します。お新は腹が立って、

「なんだって其様そんな手荒い事をするのよ、云ひつけるよ。」

「云ひつけたって恐こわかないや。」

と行きなり倉くらちゃんは飛びかゝって、お新の胸を、どんとつくつと、お新はよろ／＼とよろけて雨上あまあがりの泥路どろみちに転がりました。おね、ん、ね、こから結き紐から泥まみれに汚れました。お新の顔に大きな黒い痣あざの様に泥がつきました。背中の銀坊も亦驚いてわ——と泣き立てます。お新は余りだ／＼と悔くやし涙にくれながらそれでも銀坊を、

「いゝ兄だから泣き止むのよ、飴買ってやるからね。」

と優しくすかしながら豆腐やの店先に帰って来ると、土間の土竈の鍋でぢう／＼油揚げを拵えてゐた内儀さんの眼がぎょろりと光りました。そして

「何もかも泥まみれでどうしたんだ。」

と咬み付く様な調子で聞きます。

「その辻で倉ちゃんがつき倒した……。」

「つき倒される様な事をするから悪いんだ。さっさと銀坊を下ろして泥の始末でもしないか。」

お新は倉ちゃんから苛められた涙のまだ乾かぬ中に、又内儀さんの口小言にがみ／＼云はれなければなりません。お新は小さい溜息を吐きながら、店の畳に銀坊を下ろして、汚れたおねんねこと結き紐を抱えて裏口の井戸傍に行くのでした。

其夜お新はお父さんお母さんの夢を見ました。いつも見るお父さんお母さんの夢は、何んだかうすぼんやりしてゐて、顔を見ても見えない様な、居ても居ない様なもどかしいものでしたが、其夜の夢は如何にも判然して、目が醒めてからも二人の姿形がまぎ／＼見える様に思はれました。

夢は何所とも知らずまっ黄色い菜の花が、果てしもなく咲きつづいた中の小路を分けて、お父さんとお母さんとそして小さい赤ん坊のお新と三人で、とぼ／＼と歩いてる所でした。お父さんとお母さんは六部僧の着る様な白い着物をきて、白い円い笠を被って、そして腰の前に提げた小さい鉦をカン／＼叩いてゐました。お新自身は抱れてゐたのか、又おんぶされてゐたのかその辺はよく分りませんが、

たゞ赤ん坊の自分がその二人と共に居^ゐつたと云ふ事は確^{たしか}であります。そして行つても――菜の花の黄色い路ばかりです。その間を鉦のカン／＼となる音が遠くの空の雲に響く様に思はれました。お新はその美しい菜の花と、カン／＼カン／＼響く鉦の中にうと／＼してゐると、

「お新ッ、起きな。」

と毎朝の内儀^{かみ}さんの鋭い声に呼びさまされたのでした。お新は飛び起きて土間の挽き木につかまつて豆を挽きはじめながら、まだ眼のまへには菜の花の一面に黄色い路が見える様に思はれました。而^さして耳の底にはまだカン／＼カン／＼と鳴る鉦の音が聞えてる様に思はれました。そして何とも云はれぬいゝ心持ちでありました。

銀坊をおんぶして表に出た時、お新は町の通りを東へ真直^{まっすぐ}に急いで町端^{まちばた}れの田端^{たばた}の見える所まで参りました。春も四月半を過ぎ^{なつか}て長閑^{のどか}な暖いお天気でありました。畑^{はた}には麦が青い穂を吹いて、野には紫雲花^{げんげ}や菜の花が、紅^{くれない}や黄や紫の色取り美しく、友仙模様の織物でも敷き詰めたかの様に見えしました。空はぼーとした霞でこめられて、その中に輝く太陽も、うっとり心持ちのよい夢でも見てる様な光です。その中を小さい雲雀^{ひばり}が高く／＼上^{あが}つたり、又石でも投げたやうに急に舞ひ落ちたりして鳴いてゐます。お新は銀坊を野路の柔かい草の上におろして、どっと四方の景色を見渡しながら、昨夜^{よんべ}見た夢の事を考へました。さうすると向ふに見ゆる黄色い菜の花が、なんだか夢の中からずっと引き続いてる菜の花の様に思はれ出しました。耳をすまして聞いてゐると、雲雀のチ、チ、チ、チ、と鳴いて